キリスト教と近代化の諸相　現代キリスト教思想研究会
2008 年 3 月　35～48 頁

「近代」を生きた内村鑑三

岩野　祐介

日本における近代とは何か？

我々は幕末から明治期、19 世紀後半の日本における、政治、経済、文化、思想、様々な分野での変動を「近代化」として理解している。それは西欧化という側面をもつものでもある。もちろんこれは間違いではないだろう。しかしここには、「ポスト近代」と言われる現代にいる我々だからこそ明治大正期を「近代」として対象化することが可能なのである、という側面がある。本稿では内村鑑三における「近代」とは何であったのか、という問題を取り扱うが、近代・近代化の真っ只中の時代を生きた内村にとっては、「近代」を対象化するということは難しいことだったのではないであろうか。

そもそも現代が「ポスト近代」であるからといって、既に近代ではないということになるのかといえば、決してそのようなことにはならないであろう。何故ならば、我々の思考体系はかなりの部分で近代的思考法（ここでは主に主体客体二元論的・科学的な世界観に基づく思考法を近代的思考法とする）に影響されているからである。もっと具体的に述べるならば、我々があるもの・ことについて判断する際の価値観は、科学的に見てどうかということに非常に強く影響されており、それはほとんど絶対的といってもいいような判断基準となっているのではないだろうか。もちろんその絶対性が孕む危うさに気づいている、という点では確かに現代は「ポスト近代」的であるが、しかしその代替的なものを見出せてはいないであろう。近代が気に入らないからといって「美しい」前近代に憧れるという心情的主張をする向きもあるようだが、それは時代を逆行することであり、これまでの歴史的選択の積み重ねを否定することでしかない。逆行ではなく、近代を発展的に乗り越える方向性を模索しているのが現代であり、近代の捉えなおしという作業もまたそのために行われるべきではないであろうか。

内村における「近代」

本稿では内村がこの「近代」をどうとらえていたか、ということについて確認するため、彼の著作における「近代」という語の用い方を調べてみることにする。ただしここで内村の著作全てを詳細に検討することは時間の制約上不可能であるので、さしあたってはタイトルに「近

代」、及びそれに類する「現代」等の語が含まれる文章を網羅してみることにする。それらの文章においては内村が意図的に近代という言葉を用いているはずであるから、そこから内村の「近代」観を取り出すことも可能であるだろう。

まずタイトルに「近代」を含む文章を以下に一覧とした。11 篇がある。

「近代主義と基督教」全集 30　1927 年 10 月

「近代人」全集 20　1914 年 1 月

「近代人気質二つ」全集 31　1928 年 9 月

「近代人と基督信者」全集 29　1925 年 2 月

「近代人に就いて The Modern Man」全集 28　1924 年 2 月

「近代人の愛と基督信者の愛」全集 29　1925 年 5 月

「近代人の神」全集 29　1925 年 1 月

「近代人の基督教（現代思想と基督教）」全集 30　1927 年 7 月

「近代人の聖書観」全集 25　1920 年 11 月

「近代に於ける科学的思想の変遷」全集 17　1910 年 1 月

「近代の基督教 Modern Christianity」全集 29　1925 年 9 月

続いてはタイトルに「現代」を含む文章である。

「現代思想と基督教」全集 30　1927 年 7 月（上記「近代人の基督教」を内に含む）

「現代主義とアメリカ主義 Modernism and Americanism」全集 29　1925 年 3 月

「現代神学に就いて Modern Theology」全集 28　1924 年 3 月

「現代日本人の宗教熱」全集 27　1922 年 3 月

さらにタイトルに「近世」を含む 4 篇の文章がある。

「近世の偶像」全集 16　1908 年 12 月

「近世の聖書研究」全集 15　1908 年 4 月

「近世の二名士」全集 15　1908 年 2 月

「近世婦人の要求」全集 14　1906 年 9 月

他に、「近来」という語を用いたものがある。1911 年 3 月（全集 18）の「近来の信仰に就て」である。

次に、これらの「近代」「現代」「近世」「近来」等の語に、意味上の使い分けがあるのかどうか、確認しておく必要があるだろう。

注目すべきは「近代人に就いて The Modern Man」「近代の基督教 Modern Christianity」と「現代神学に就いて Modern Theology」である。両者とも、英語 modern の訳語として、それぞれ「近代」「現代」が用いられているからである。つまり内村にとっては、modern という概念

の訳語は近代でも現代でもよかった、ということになるのではないだろうか。また「近代」という概念がこのようにもともと輸入されたものである、ということには注意が必要なのではないか。

「近来」

そこで以下ではこの用語の問題を、それぞれの文章の内容を比較することから確認したい。まずは数の少ない「近来」から検討をはじめることとしよう。

「近来の信仰に就いて」で内村は次のように述べる。

「余輩は無教会主義者なりと雖も近来唱えらるゝ所の「新神学」又は「新福音」には大不賛成である。」[1]

このような言葉から見る限り、ここでの「近来」とは時代区分としての「近代」ではなく、「最近」の意味と考えて問題ないであろう。「新神学」「新福音」とは、「キリストの尊きは彼の伝へし道義に因るのである、神は父であつて愛である、而して人類は兄弟であつて互いに相愛すべき者である、之が基督教の根本であつて、是れさへあれば他の事は無くとも可い」と考えるような神学であると内村は述べている。これはいわゆる自由主義神学の影響下にある神学を指すと思われる。

「近世」

続いて「近世」である。年代順に内村の文章を確認していくこととして、1906 年 9 月の「近世婦人の要求」[2]はどうであろうか。内村によればこの近世婦人とは「府下の或る高等女学校に教育の任に当らるゝ貴婦人」であるという。よってここでの「近世」は、「最近の」あるいは「現代の」といった意味であろう。なおこの女性は内村に「この世と宗教との衝突をどう考えるか」「キリスト教と科学は衝突しないか」「仏教でいわれる無我の愛とキリスト教の愛とはどう違うか」といった質問をしたとのことであるが、本稿でその内容について詳しく扱うことはしないことにする。

一方 1908 年 2 月の「近世の二名士」[3]では、キリスト教批判者ヴィヴィアンとキルケゴールが「近世の二名士」として挙げられる。1855 年にキルケゴールが没してから 50 年あまりしか経っていない時期に書かれた文章であるから、ここでの「近世」は広い意味での「最近」という意

[1] 内村鑑三「近来の信仰に就て」1911、『内村鑑三全集 18』、99 ページ。（『内村鑑三全集』1980-84、岩波書店刊。以下『全集』と表記）なお内村の文章にはしばしば各種傍点やゴシック体等により強調されている個所があるが、本論文内の引用文では、それらの強調は一部を除いて再現していない。また、基本的に旧字体をそのまま用いた。
[2] 内村「近世婦人の要求」、1906、『全集 14』、271-　ページ。
[3] 内村「近世の二名士」1908、『全集 15』、385 ページ。

味合いと解釈しても問題はないのではないだろうか。なお内村はここでキルケゴールを、教会を批判するキリスト者として取り上げており、いわゆる近代批判者としてのキルケゴールというニュアンスは特に感じられない。

続いて 1908 年 4 月「近世の聖書研究」より引用したい。

「近世の聖書研究は主として外よりする研究なり、言語学と考古学と比較宗教とに由る研究なり、故に聖書の真義に達する難し、聖書は歴史にあらず、美文にあらず、信仰の書なり、故に信仰に由らずして其真意を探る能はず、…労多くして功尠しとは近世の聖書研究を謂ふなるべし。」[4]

このように内村は、ここではっきりと近代主義とでも言うことができるような要素を取り扱っている。聖書の無謬、あるいは逐語霊感説を主張する立場は 19 世紀にもあったのであるから、「近世」にもまたそのような古典的手法の聖書研究はあったはずなのである。それにも関わらず内村はここで、「近世の聖書研究」を科学的・歴史的手法による聖書研究であると特徴付ける。この科学性の重視は近代主義の特徴である。そしてそれが「聖書の真義」に達するためのふさわしいやり方ではない、との主張は、後述する「現代神学」に関する内村の批判とも重なるものである。

続いて、「近世の偶像」においてはどうであろうか。

「社会と云ひ教会と云ふ、然れども二者共に実在する物にあらず、人の想像になる偶像たるのみ、故に之に訴ふるも聴かれず、之に求むるも与へられず、
近世の偶像も昔時の偶像と異ならず、之を作る者と之に依頼む者とは皆な之に均し、唯ヱホバに依頼む者のみ救はるべし。」[5]

「近世」が「昔時」と対比して用いられていることから、ここでの「近世」は「今」をあらわす意味で用いられていると考えてよいだろう。すなわち時間的に新しいということであって、それ以上の意味合いはないように思われる。

以上確認してきたことより、内村が近世、近来等の言葉を用いる場合、そこで表そうとする意味合いは大別して二系統あると言うことができそうである。一つは単純に今に近い、最近、昨今、という意味合いであり、もう一つが自由主義、科学主義的意味合いを含む「近代的」なものである。以下ではこのことを、さらに「近代」「現代」の用法を通して確かめてみたい。

---

[4] 内村「近世の聖書研究」1908、『全集 15』、430 ページ。
[5] 内村「近世の偶像」1908、『全集 16』、138-9 ページ。

「近代」

まずは「近代」から確認してみよう。上述した「近代」をタイトルに含む文章を年代順に並べなおして数えると、次のようになる。

1910 年（全集 17）：1 篇、1914 年（全集 20）：1 篇、1920 年（全集 25）：1 篇、1924 年（全集 28）：1 篇、1925 年（全集 29）：4 篇、1927 年（全集 30）：2 篇、1928 年（全集 31）：1 篇

「現代」も同様に確認すると、1922 年（全集 27）、1924 年（全集 28）、1925 年（全集 29）、1927 年（全集 30）各々一篇ずつ、となる。

これらを見ると、全集 28 から 31 にかけての時期、すなわち 1924 年から 28 年にかけての時期に比較的「近代」「現代」について扱ったものが多いことが特徴として挙げられよう。一方先程検討した「近世」は、すべて全集 14－16 の時期に含まれる用例である。1924 年から 28 年にかけての時期は大正 13 年から昭和 3 年に該当し、いまは「近代」であり、日本は近代的国家になったのだ、との自覚が持たれるようになった時期であったと言えるように思われる。よって、用いられる言葉の変化については社会一般における言葉の使われ方が反映している可能性も十分に考えられるのであるが、この問題は今後の課題とするとして、ここでは続いて「近代」という言葉の使われ方に考察を加えよう。

「近代」という言葉は、「近代人」といった形での連体修飾語としての用法が多い。これは内村の意識が、時代区分、時期としての近代そのものよりも、近代の人間、あるいは近代のキリスト教、といった、「近代の何か」に向かっていたことを示すものではないだろうか。そこで以下では、内村がとらえた近代、あるいは「近代人」「近代主義」など、連体修飾語として近代が用いられる場合のその中身、ニュアンスについて年代順に検討・確認していくこととしよう。

「近代」

タイトルに「近代」という語が含まれる文章のうち、もっとも古いものは 17 巻におさめられた 1910 年の「近代に於ける科学的思想の変遷」である。しかしこの文章はタイトルが示す通り主に科学思想の変遷について論じられたものであって、本文中で近代ということを時代として捉え、それについて論じようというものではない。この文章ではそもそも「近代」という言葉が本文中に用いられていないのであって、近代ということばは「この数年」といった意味合いしかないように思われる。

「近代人」

続いて「近代人」である。用例が多いので、ここでは代表的なものを挙げる。

「近代人」という言葉がタイトルに含まれる文章のうち、最も時代が古いものは 1914 年 1 月の「近代人」である。ここで内村が述べる「近代人」とは、以下のようなものである。

「彼に多少の智識はある（主に狭き専門的智識である）、多少の理想はある、彼は芸術を愛し、現世を尊ぶ、彼は所謂「尊むべき紳士」である、然し彼の中心は自己である、近代人は自己中心の人である、自己の発達、自己の修養、自己の実現と、自己、自己、自己、何事も自己である、故に近代人は実は初代人である、原始の人である、猿猴が始めて人と成りし者である、
彼は自己の慾望を去て神の聖業に参与せんと為ない、却て神をして自己の事業を賛成せしめんとする、近代人はキリストの下僕ではない、其庇保（ベトロン）者である、彼は彼の哲学と芸術と社会政策とを以てキリストを擁立んとする、即ち彼はキリストに救はれんとせずしてキリストを救はんとする、…
自らキリストの下僕たる事を廃めて而かも基督信者の名を負はんと欲す、曰く我も亦基督信者なりと、キリストの十字架は之を避けんと欲す、而かも基督信者の名誉と利益とは之を受けんと欲す…」[6]

この内村による手厳しい批評から、彼の考える「近代人」の特徴として次のようなことが挙げられるであろう。まずなんといっても「近代人」は自己中心的であることである。そして内村にとって自己中心とは、自己の正当化あるいは絶対化につながるものであり、それは畢竟罪意識の欠落であるとされる。故に近代人は救済を求めない、ということになる。罪責意識のないところに、救済への深刻な要求は生じないからである。十字架のキリストによる贖罪を求めようとはせずに、キリスト教のもたらす文化的、芸術的、あるいは社会福祉的なメリットは取り入れようとするのが近代人である、ということになるであろう。

この自己中心性とは少し異なる要素が、以下の近代主義に関わる問題である。これは合理主義、科学主義とでも言えるものである。ここに記すのは 1920 年 11 月「近代人の聖書観」からの引用である。

「米国オハヨー州オバーリン大学新約聖書文学教授…E・I・ボスワース氏…の近著『羅馬書註解』に依れば、羅馬書は明らかにキリストの再臨を教ふるの書であつて、其事を疑ふの余地はない、再臨を根本思想と見ずして羅馬書は解らない、然し乍ら近代人は再臨を信ずる事は出来ない、近代人は進化の理に基づく宇宙万物の完成を信じ、神の子の再臨に因る新天新地の出顕を信ずる事は出来ない、…而して近代人に関し最も不思議なる事は、彼等が斯くも公然と明白に、既に信ずるの価値なき思想を伝ふると称する其聖書を、世界第一の書、または人類最上の経典として仰ぎ戴く事である、…羅馬書は明かにキリストの再

[6] 内村「近代人」、1914、『全集 20』、239-40 ページ。

臨を伝ふ、然れども再臨は誤謬である、迷信である、近代人は之を信ずる事が出来ないと、「可なり」と余輩は答ふるのである、然らば羅馬書を棄てよ、棄てるのが正直である、学者らしくある、…」[7]

近代主義の象徴は科学重視であるが、ここではその代表として「進化の理」、すなわち進化論が挙げられている。そして一方で科学的に聖書を「迷信」と断じながらも、キリスト教的なものから完全には脱し得ない状況を、内村は欺瞞的であると述べるのである。内村が進化論を近代主義の代表として挙げているのは象徴的である。あるいは、社会全体の進化を含む進化論が信じられていた時代を近代と定義することも可能であるかもしれない。なお内村本人は当初人間社会の進化により世界は完成へと近づく、という社会進化論を奉じていたが、彼の立場は次第に変化し、特に第一次世界大戦以降は完全にこれを放棄してキリストの再臨による救済を論ずるようになる。

以下、「近代人」に関わるいくつかの文章を引用するが、内村の基本的なスタンスは 1914 年の文章から変わっていない。それは即ち、彼をとりまく物質面での近代化を進める日本の状況が変化していないことを表していると言ってもよいであろう。

「近代人は恐ろしくある。彼は自己主義が極度に霊化したる者である。彼は自己に就て毛頭疑はない、而して万時に就いて自己の判断の正しくあるを固く信ずる。彼は万物を自己に服従せしめんとする、然れども自己は何者にも服従しない。彼に彼れ自身の道徳がある、又彼れ自身の神とキリストとがある。」[8]

「近代人他なし、自己を神として仰ぐ者である。道徳の標準を自己に求むる者である。極端の主観主義者である。」[9]

「〇「自己に覚めよ」、と近代人は云ふ。而して彼らは自己に覚めて何を発見せしやと問ふに、自己の価値ある事、自己に権利ある事、自己の自由なる事、無限に発展して宇宙を我有とするの資格ある事を発見したりと答ふ。

〇基督信者も亦自己に覚めたる者である。然れども彼は近代人の如くに覚めたる者ではない。基督信者は自己に覚めて自己の罪人なるを発見する。…そして自己に於て非ずして、キリストに於て、満足と歓喜とを発見した。」[10]

なお内村が「近代」と「現代」の両方を用いており、さほど使い分けようとの意図が感じら

[7] 内村「近代人の聖書観」、1920、『全集 25』、584-5 ページ。
[8] 内村「近代人に就て」、1924、『全集 28』、128-9 ページ。
[9] 内村「近代人の神」、1925、『全集 29』7 ページ。

れないことは上述したが、「近代人」をタイトルに含む文章が複数あるのに対して「現代人」という言葉がタイトルに含まれるものは見当らない。「現代日本人」という形が１篇あるのみである。ではそこで内村はいかなる論述をしているだろうか。

「〇日本人は今や頻りに宗教を要求する、然し乍ら彼らが宗教を要求するは美術愛玩者が美術を要求すると同様である、…唯自分は宗教の外に立ち、之を批評し之を愛玩し遥に之を望んで其美容に憧れんとする、現代日本人の宗教熱なる者は之れ以上に達しないのである、…
宗教は思想問題に非ず、哲学問題に非ず、社会問題に非ず、正義問題であつて、先づ第一に自分の問題である、自分を確実に罪より救つて呉れる宗教、其れが真個の宗教である、…」[11]

ここでトピックとして扱われているのは、「現代」日本人というよりも現代「日本人」であるが、ここで内村が美術に擬えているように宗教に対して文化的に接しようとする態度に対する批判をしているという点では、先程までに確認してきた「近代人」に対する批判と重なるものがあると言えるであろう。美術という比喩はなかなか適確である。ただ絵画の美しさを味わうだけではなく、自らも絵筆をとろうとするべきだ、というのが内村の実験主義（体験主義）的な宗教理解であるということになると思われる。

続いて、近代主義、現代主義、現代思想といった言葉の使われ方を確認してみたい。

「近代主義」

1927 年の「近代主義と基督教」において、内村は興味深い論述をしている。

「〇日本に於ては近代人と云へば甚だ悪い者である。自己中心で、主観的で、何事も自己本意に解釈し、神をも人をも自己の意見を達成せんがために利用し、而して人生を最大限度まで楽しまんと欲する者、之を称して近代人と云ふ。…
〇然し乍ら西洋に於ける近代人は大に之と異なる。西洋に於ては近代人即ちモデルニストは真面目の人である。彼等は旧い宗教と道徳を棄んとするに非ず、之を近代的に立直さんとする。即ち近代思想、殊に近代科学の上に旧い信仰の基礎を発見せんとする。」[12]

内村がここで日本の近代という状況と、西洋のそれとを区別していることは重要であろう。これまで確認してきた文章でははっきり述べられていなかったが、特に近代人の自己中心性に関して批判される場合、それは内村が身近に体験したことであるからこそあれほどの厳しい言

[10] 内村「近代人と基督信者」、1925、『全集 29』、72 ページ。
[11] 内村「現代日本人の宗教熱」、1922、『全集 27』、130-131 ページ。
[12] 内村「近代主義と基督教」、1927、『全集 30』、442 ページ。

葉が投げかけられると考えるのが自然であり、よってそこでの批判対象は日本の近代人であると考えるべきであろう。一方科学主義に代表されるような近代の特性は当然のことながら日本だけには限らない問題である。内村の問題意識はその両方に向いているということになるのである。近代主義による宗教の探求は不成功に終る、というのが内村の見解である。

「…神を信ぜずして彼を研究的に探求せんと欲するが故に神は永久に見当らないのである。近代主義者の誤謬は茲に在る。彼等は天然の秘密を探るの方法を以て神を探るが故に之を発見し得ないのである。…神を信ぜずして彼を見ることは出来ない。故に我等は近代人（西洋の）を尊敬するが彼等の後には従はない。我等は神の事に関しては先づ信じて然る後に研究する。」[13]

内村の説は断定的であり、そこに排他的な響きさえも感じられるほどである。しかし彼は宗教の根本に関わる重要なことをここで述べているようにも思われる。つまり、神を見る（知る）ためには、神を信じねばならない、ということである。よって自然科学的方法をそのまま宗教に適応して、神に関する何かを明らかにするようなことはできないのである。

かといって、自然科学的方法の一切を内村が拒絶しているわけでもないことにも注目すべきであろう。信じて後に研究する、と内村は述べる。この研究という態度が、「信じる」ことに没入して自らを見失ってしまうような事態に陥ることを回避させる、冷静な心を保たせるのであると考えられる。近代主義が科学的方法のみで宗教を解明しようとするのに対して、内村は信仰を基礎としながら科学的方法をも用いつつ、宗教を研究すべきであると言うのである。

一方現代主義には、物質主義、快楽主義的問題も含まれている。これは人間の自己中心性に端を発する人間中心主義の問題であると内村は考えているようである。

「現代主義他なし、之を其すべての方面より見て、神よりも佚楽を愛することである。…聖詩人と共に「全地と其内の凡ての者はヱホバの有なり」と言はずして、現代人は曰ふ「全地と其内の凡ての物は人類の有なり」と。現代人は跡から跡へと地の資源を使ひ尽して顧みず、又之が為に造物主に感謝しない。又彼等は現代に於て楽しまんと欲する熱心よりして、子孫未来の幸福に注意を払わない。」[14]

このような批判はポスト近代たる現代においてこそ幅広く認識されるようになったものであり、内村の先見性はやはり預言者的な鋭さを持っていると言わざるを得ない。

科学主義、合理主義という要素も、その内容を、「人間の理性、知性により全て解明できるはずであり、そうでないものは全て無意味な迷信である」とするものであるとするならば、や

[13] 同前、444 ページ。
[14] 内村「Modernism and Americanism. 現代主義とアメリカ主義」1925、『全集 29』、77-78 ページ。

はり人間中心性、自己中心性に土台を持つものであると言うことができるであろう。ともなれば、内村が批判を加える近代的な諸要素の根底にはこの自己中心性がある、と考えることができるのではないだろうか。

内村がこのように繰り返し主張する背景には、それだけ自己の確立といったことが日本の社会の中で問題となっていたということがあると考えられる。維新から一世代経過したこの時期において、やっと封建時代の人間観から脱しつつあった、社会の仕組みや物質文明の面だけでなく、人間個人においても近代化が進みつつあった、ということでもあるだろう。個人がそれを束縛するものから自由になりつつあったのである。確かに一般的には、近代になって人間は唯一自分というものだけに縛られるようになったとされ、それを自由（あるいは自己責任であろうか？）になったと考えることが多いのではないだろうか。しかし内村によれば、その自由は真の自由ではない。内村は、絶対的な軸とすべき神もなくただ自由であろうとすれば、結局それは自己の絶対化につながり、自己で自己を縛り付けるという自由でない状態に陥る、というのである。

なお内村が批判する宗教、信仰の力が失われていることに関しては、物質面での急激な近代化によるもの以外にも理由があるように思われる。というのは、彼が『余は如何にして基督信徒となりし乎』において少年時代を回想した箇所に、次のような描写があるからである。

> 「余の父はあらゆる種類の異教の神々にむかって決定的に涜神的であった。彼はかつて仏寺の賽銭箱に一門銭を投じ、ばかにしたようにそこの仏像に言った、いま係争中の法律事件にどんな方法ででも勝たせてくれればもう一つこんな一門銭を進上しようと、―余の宗教的経験の如何なる時期にもまったく余の力の及ばない芸当であった。」[15]

武士であり知識人である内村の父のような、現実的・合理的思考に重きを置く立場は、少なくとも江戸時代後期には存在していた。科学的・合理的態度を西欧の影響による「近代化」の産物とのみ考えるのは間違いである。むしろ日本の側でもそのような「近代化」をスムーズに受け入れる土台ができていた、と考えるべきであろう。またこのような指摘は内村に限られたものではなく、植村正久にせよ海老名弾正にせよ、幕末期に仏教や神道といった日本の伝統宗教が影響力を失い、世俗化とでもいえるような状況が進行していたことを述べている。

近代のキリスト教

そのような人間中心的、自己中心的な状況の中で、批判原理とまでならないとしても、反省の契機となるはずであったのが宗教、キリスト教である。それでは近代のキリスト教は内村に

[15] 内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』（鈴木俊郎訳、岩波文庫、1938 年）14 ページ。

とってどのようなものと映ったか。彼がいわゆる新神学を科学主義のゆえに批判していたことも思い起こさねばなるまい。まず神学そのものの手法についてである。

「現代神学はイエスの人格並に内的生命を以て其の研究の主題とする。旧神学の如くに彼の受肉、復活、昇天、再臨等に注意しない。現代神学は其の根本に於て主観的である。…過度に自己を意識する。故に自由でない、又膨張しない。救拯とは主として自己意識より脱する事である。然るに現代人はその現代神学を以って、自分が離れんとして努めつゝある束縛に自分を繋ぎつゝある。真の信仰は客観的であつて主観的でない。我等の為に十字架に釘けられしイエスを仰ぎ見る事であつて、我等の罪に満ちたる自己を顧みることでない。…外なる世界の実在を主張する唯物論は、自己意識の病的探求に没頭する現代神学に勝ること数等である。」[16]

近代の神学は客観的・科学的に証明できないものを避けた結果、イエスのメッセージに含まれる倫理性（ここで内村が言うところの人格）に向かったとも考えられるのであるが、内村は寧ろそれを主観的であると述べる。何故ならばそれは、人間の外にある事態である十字架の出来事と復活、昇天、再臨を論じないからである。あるいはそれもまた弟子たちの心の中で起った出来事ということにされて「内面化」されてしまうかもしれない。解釈の合理性においてはその方が優れているかもしれない。しかしそれでは「自己意識から脱する」ことができない、と内村は述べるのである。

もう一つの問題はキリスト教の中心が信仰ではなく社会活動、文化活動になってしまうことである。

「今や基督教と云へば社会改良、生活改善に奔走努力する事である。或は言語学、考古学、哲学、比較宗教と称し、研究に研究を積んで、聖書の意味を瞭らかにし、基教発達の由来を示す事である。或は万国会議を開いて人類幸福の増進を計る事である。然れども、噫然れども福音は何処に在る乎。」[17]

このような状況は変わらぬどころか、寧ろ時の流れにつれて進行していったと考えられる。続く 1927 年 7 月に内村は再度「現代思想と基督教」の問題を取り上げることになる。

「…教会と宣教師とは今や聖書に対して如何なる態度を取りつゝある乎。彼等は聖書研究を以て信仰第一の用件と見做さない。…今日の宣教師、彼等に使はるゝ牧師伝道師等が主として読むものは聖書でない、心理学書である、社会学書である。

〇私が第二に怪しとする事は、今日の信者、殊に宣教師の間にキリストの神性が討議せら

[16] 内村「Modern Theology 現代神学に就て」、1924、『全集 28』、164 ページ。
[17] 内村「近代の基督教」、1925、『全集 29』、301-2 ページ。

れない事である。

〇今日の基督教会は全然進化論に降参したのである。…今や宣教師の或者は公然曰ふて憚らない、「我は世界を人間の住所に適する所と成さんと欲する者である、人間を作らんと欲する者でない」と。此は実に驚くべきステートメントである。人間を作るのが宣教師の職務でないと云ふのである。境遇を善くすれば人は自から善く成ると云ふのである。此は極端の進化論である。直に天然に就て学ぶ学者は斯くまで極端に境遇の偉力を唱へないのである。」18

この時点で既に聖書研究よりも牧会カウンセリングが求められるような状況が生じていたことは一面驚くべきことでもあるが、国家と教会といった大きな問題だけでなく人間一人一人の内面の問題へとキリスト教が向かうようになったことは、それ自体が悪いことではないであろう。救済とはまず人間一人一人の内面が問題となることであるからである。また人間個人が問題とされ得るためには一定程度社会が政治的経済的に安定していることが必要である。この時期、日本の社会がそれなりに安定した段階に達していたと考えることもできるのであり、そのような社会を作るためにキリスト教が果たした役割は決して小さくはなかった。ただ、それは教会の第一義の仕事ではないだろう、というのが内村のここでの主張である。

もちろん、ただ聖書だけを読んでいれば自ずと人生の問題が解決されると彼が考えていたわけではない。内村は、個々人の内面の問題に答えるにせよ、社会問題に答えるにせよ、キリスト教の立場で答えようとするのであれば、聖書にもとづく信仰によって答えねばならないのではないか、と言うのである。

まとめに代えて

以上、内村による「近代」「現代」による言及より確認されたことをまとめておこう。まず内村が批判する根本的なポイントは自己中心性にある。これは近代人の特徴であるとされるが、同時に人間に本性的に備わったものでもある、とされる。本性的なものでありながら近代において特にそれが目立つのは、一つは自己中心性を抑える重石として機能していた社会構造、すなわち身分制度や封建的人間関係のあり方が近代になって変わったからであり、もう一つは、自己中心性を発揮した結果が従来とは比べものにならないほどの重大なものになるだけの技術を、近代になって手に入れたからであると考えられる。

この自己中心性は、人間が相互に合理的にふるまったり、あるいは社会の仕組みを整えたりすることによって解決され得るものであるという考え方もあり得るであろう。生活そのものが安定して豊かなものになれば、周囲の人間や環境のことを気遣った生き方ができるようになる

[18] 内村「現代思想と基督教」1927、『全集 30』、373-5 ページ。

はずだ、という考え方である。それを反映するのが社会進化論である。しかし、内村はそうは考えない。自己中心性は人間の手によってではなく、人間の外にあるキリストを信じ仰ぎ見ることによりのみ、そこからの解放が得られると彼は考えるからである。その背景には内村自身の回心体験があり、そして過去 1900 年のキリスト者の歴史がある。

また一方、人間の手によって人間を変えようとする試みは、事実としても上手くいっているとはいえないと内村は指摘する。実際に多くの社会問題や、あるいは環境問題が自己中心性、人間中心性により生じているからである。そうではなく、内村によれば、神と共にあることがひいては他とともにあることを意識することに繋がり、他者や環境への感謝を抱いた生き方へと通じる、ということになるのである。

ここまで確認してくれば、以上のような内村の主張は、決して過去のものではなく、現代においても重要な示唆を含むものであることを理解できるのではないだろうか。周囲の人間に対する無関心や自然環境の悪化など、これらの問題の多くは、現代の我々が直面している課題でもあるからである。現代の日本の状況にキリスト教がいかなる貢献ができるか、という問題を考えるとき、内村の取り組みは手がかりとなりうるものであろう。

（いわの・ゆうすけ　神戸松蔭女子学院大学非常勤講師）